

## 解 答



問一 他の人と同じようにするまいとして、わざと変わったことや珍しいことをして自己顕示をする人。

問二 ウ

問三 万人のうちのほとんどは、本物だとみんなが言うから本物なんだろうと、感動した気になっているだけだから。

問四 他の人に感動をもたらす〔人。〕 共にそれを感じている〔人。〕

問五 自分のしたいことに命と人生のすべてをかけている人や、そういう人の姿や仕事に共感できる人。

問六 ア ○ イ × ウ × エ ○ オ ×



問一 a 寸前 b 都合 c 宣言 d 暖 e 照

問二 三上くんは転校することを言い出せなくて、うしろめたい気持ち。

問三 エ 問四 ウ 問五 ア 問六 ア 問七 オ

問八 Aでは、見たこともなかったかまくらは憧れでしかなかったが、Bでは、転校により三上君と別れなければならないことがわかって、二人の友情の証と思えるものとなっている。

## 解 説



出典は、池田晶子『十四歳からの哲学』『本物と偽物』。自分を捨てて無私な人になることが個性的な人になることであり、自分を越えた大きなものに触れることのできる、本物の人であると述べています。

問一 ——線部のあと3行～5行の部分に「人と同じようにはするまい、人と同じようにはあるまい、という他人を気にする気持ち」があり、「わざと変わったことや珍しいことをして自己顕示する」とあります。ここを使用してまとめます。

問三 まず、——線部「この言い方」が直前の一文を指すことを確認しましょう。「ゴッホの仕事が万人に感動をもたらすのはなぜだろう」という「言い方」は正確ではなく、——線部の直後で、「万人のうちのほとんどは、ゴッホは本物だとみんなが言うから本物なんだろうと、感動した気になっているだけかもしれない」と考え直しています。

問五 「本物の人間」の例として、「ゴッホ」と「ゴッホの姿やその作品に感動できる人」をあげて説明しています。「たとえば、ゴッホという画家の～」という例が始まる直前に「彼はそれ（＝自分がしたいこと）をすることに命と人生のすべてを賭けているんだ」とあるので、ここを使って答えの前半とします。後半は、ゴッホの例の後（3ページのの真ん中あたり）の「他人の仕事やその姿に感動できる」を使います。

問六 アは問四・問五でやったように、○です。イは、問一でやったように×。ウは「天を知り、天を見ることができるようになる」という目的のために逆説が重要なわけではないので×。エは、「個性的な人＝つまらない自分を捨てることができる人＝本物の人」であり、「得することばかりを計算する人＝偽物の人」といえるので、○。オは、「真似をしていくうちに～本物となる」の部分が×。



出典は、重松清『その年の初雪』。転校が決まったことを親友の三上くんには話せずに悩む泰司と、それを聞いた三上くんの気持ちが、「雪」をめぐるできごとと重ねながら描かれています。

問二 泰司の心情は8ページに書かれています。自分が転校することを三上くんには打ち明けなければと思うのに言えずにいます。目が合わせられないのは相手に対して引け目を感じたり、うしろめたい気持ちがあるからです。このふたつを組み合わせると答えとします。

問三 エ「すなおに」は「すなおだ」という形容動詞ですが、それ以外はすべて「副詞」です。

問四 直前の「調子のいいことばかり言って。」に注目します。「雪が積もる」と自分が言い張り、それを打ち消す三上くんとけんかになりましたが、そのことを気にして「積もるんじゃないか？」と言ってくれた三上くんの気持ちを、「調子がいい」と言いながらもうれしかったのです。

問五 三上くんが、「引越さないで自分の家にいそうろうすればいいのに」と言っていることがわかり、自分と離れたくないと思っている三上くんの気持ちが伝わりうれしく思っています。このあとに、「三上くんも自分の言葉に急にてれてしまったみたいに」とあることから、泰司も照れくさかったことがわかります。そのため笑顔が微妙にゆがんでしまったのです。

問六 三上くんは、泰司を自分の家にいそうろうさせたいと言い出すくらいに、泰司と離れたくないと思っています。つらく悲しい気持ちから涙が出そうになり顔が「ゆがんで」しまいましたが、それを振り払おうとしているのです。